

第3回若山牧水みなかみ紀行短歌大会 作品集



若山牧水みなかみ紀行短歌大会実行委員会

第三回

若山牧水みなかみ紀行短歌大会

一般の部 入賞・入選

【最優秀賞】 一首

君の背に「好き」
って書いたあの夏の貝殻ひとつさよなら
ごめん

北海道

後藤

明美

【優秀賞】 二首

割らるるを待つ卵殻に包まれて夜の静寂しじまに眠るこの町

山口県 瀬戸内 光

上陸を果たしたばかりの幼蛙畦草刈れば一斉に跳ぶ

群馬県 桑原 謙一

【特別賞】 二首

《伊藤一彦 選》

わが慕ふキーン氏に続き夫逝きぬ願はくば連れ立ちて黄泉路を

神奈川県

蓮見

孝子

《小島なお 選》

鋸を挽く巣箱の屋根の勾配の鉛筆の線冬の日の差す

愛知県

清水

良郎

【入選】二〇首

それぞれにそれぞれの富士なつかしき津軽に若狭に讃岐に薩摩

愛媛県

宇和上

正

風向きを確かめながらヤマボウシの花散る下に来る人を待つ

青森県

木立

徹

雪形の崩れ歯ブラシで指し示し祖父は峡田かいだの田植日を計る

群馬県

細矢

九谷

「これ僕の哲学ですよ」と友のいふ「こたはりでせう」と云はずにおこらう

群馬県

熊澤

峻

郭公かつこうの鳴声きこゆ法師の湯昔も今も宿は一軒

群馬県

林

いくじ

芳香のそこはかと無く漂いぬ競りを終えても花卉市場には

埼玉県 若山 巖

濃く淡くみどりに萌ゆる奥吉野陀羅尼助有貼り主は留守

大阪府 赤澤 皆春

粛々と群れ行く影を横に見て駅を出る吾は元の牛飼

茨城県 風森 漣翠

親指と人差し指の長方形のぞいて見れば蕎麦の花だけ

群馬県 本多 義二

恋焦がれ利根の河原を涉りたる歌碑に残りし万葉の女

群馬県 番場 正夫

一年生を子亀のやうに背に乗せて泳いだ泳いだプールができて

群馬県 細川 のぶ子

草をひくおみな姫に声かけ目を凝らす後の七人全員かかし

群馬県 田村 鶴江

赤啄木鳥か小啄木鳥だらうかドラミング出勤前を耳澄ましゐる

群馬県 眞庭 ヨシ子

吃音を隠し下向く高校の庭にはたしか白詰草が

山口県 松本 進

雨降ってふて寝する猫横に見て同じ格好でとがってる嫁

群馬県 篠原 悦二

母の背の小さかりけり雨の日を田草取らむと蓑をまとへど

群馬県 眞庭 義夫

行き付けのうどん屋に立つ煙突は煙をあげて営業知らず

群馬県 林 郁男

娘も孫もわが梅干を欲りたれば八十路すぎし身木のぼりもせり

群馬県

板橋 きみ江

聞こえぬにひたすら待ちし時鳥きこえぬ耳を疑はずして

東京都

荒井 千枝

見飽きたる顔よとおもふ用ありてひげを剃る顔取り替へ効かず

福岡県

西山 博幸

第三回

若山牧水みなかみ紀行短歌大会

中学生・高校生の部

入賞・入選

【最優秀賞】 一首

日本一我が県貫く水色の服は大きく袖は多く

群馬県 利根商業高等学校2年 高橋 陸仁

【優秀賞】 二首

夏の日
は魚を
思いい
ざ行く
よ魚と
言う名
の恋人
に

群馬県 利根実業高等学校3年 飯村 剛士

昔のね
あなたは
ずっと
こうだ
った今
言われ
ても知
らねえ
んだわ

群馬県 利根実業高等学校3年 宮城 亜美

【特別賞】 二首

《伊藤一彦 選》

みなかみのバンジージャンプ飛ぶ時に見える景色が大自然

群馬県 新治中学校3年 井浦 信

《小島なお 選》

青空に一人で歩く太陽ののろまな帰り僕の休日

群馬県 水上中学校3年 田村 鴻之介

【入選】 二〇首

この春で新しくなる友の声夏もこの声
樂しめそうだ

群馬県 利根実業高等学校1年 石田 侑亜

えんがわにすわれれば来たよ動くかげ
おいでと呼べばワンとほえられ

群馬県 利根実業高等学校1年 立木 愛梨

水芭蕉風に吹かれるその姿さながら
眠るゆりかこの赤子

群馬県 利根実業高等学校2年 高橋 龍之介

縄文の息を感じる土の色心を宿すその
眼の奥に

群馬県 沼田高等学校1年 平井 謙伸

赤谷川の川原の石を持ち上げてカニが
おどろく我が夏の日を

群馬県 月夜野中学校2年 千明 俊生

夏祭り友達つれて出店行き全然当たる気がしないくじ

群馬県 利根実業高等学校2年 郷原 伯

寝ていたら寝ているようで起きてたら寝ているようですぐ怒られます

群馬県 沼田高等学校2年 高橋 寿成

ある夏のもっとも熱い夢の国ねずみの中身とてもきつい

群馬県 沼田高等学校2年 古俣 成聖

音楽を聴きながら待つバス停で見える紫陽花イヤホン外す

群馬県 利根実業高等学校1年 石田 桜雪

垢ぬける言葉の意味を知らぬまま僕らはきつと垢ぬける

群馬県 利根実業高等学校1年 後藤 美咲

帰り道隣にならぶ君の目に映る空に嫉妬する我

群馬県 利根実業高等学校1年 星野 愛真

怖いもの見たくないねと言いつつもなぜか見ている君も怖い

群馬県 利根実業高等学校1年 山田 将人

中三が今年最後の大会で三敗一勝先生が泣く

群馬県 利根実業高等学校2年 新妻 飛鶴

満開の四葩よひらの下に雨蛙真つ赤に染まる雲を感じて

群馬県 利根実業高等学校3年 吉澤 梨緒

さびしいな利根実の門くぐることだって近づく卒業式

群馬県 利根実業高等学校3年 本多 里美

フワフワでシロップたっぷりカキ氷頭キーンが夏の友達

群馬県 利根実業高等学校3年 近野 美咲

話し声君かと思つてふりむいた分かつていても二度見してしまう

群馬県 利根実業高等学校3年 生方 啓太

夕焼けの道を歩いて僕たちは互いの気持ちに嘘をつけない

群馬県 利根実業高等学校3年 桑原 凛音

海泳ぎきれいな魚が空翔ける鳥のようなきれいな魚

群馬県 月夜野中学校2年 菅沼 祥汰

みなかみのきれいな水で生まれたよいちごにりんごにさくらんぼ

群馬県 新治中学校3年 岡田 天平

◆ 選者紹介



伊藤 一彦（いとう かずひこ）

昭和十八年（1943）宮崎県生まれ。「心の花」選者。読売文学賞、迢空賞、斎藤茂吉短歌文学賞などを受賞。現在、牧水の生誕地宮崎県日向市の若山牧水記念文学館館長、宮崎県立図書館名誉館長、宮崎県立看護大学客員教授。歌集に『海号の歌』、『微笑の歌』、『月の夜声』、『光の庭』、『待ち時間』などのほか、『若山牧水―その親和力を読む』、『牧水の心を旅する』、『いざ行かむ、まだ見ぬ山へ』、『歌が照らす』などがある。



小島 なお（こじま なお）

昭和六十一年（1986）東京生まれ。コスモス短歌会所属。同人誌「cocoon」編集委員。歌人である母小島ゆかりの手伝いをして短歌に興味を持ち、青山学院高等部在学中の2004年に角川短歌賞受賞。その他、現代短歌新人賞、駿河梅花文学賞受賞。歌集に『乱反射』、『サリンジャーは死んでしまった』などがある。現在、日本女子大学講師。

第三回

若山牧水みなかみ紀行短歌大会

入賞作品講評

一般の部、中学生・高校生の部

《一般の部》

【最優秀賞】

君の背に「好き」って書いたあの夏の貝殻ひとつさよなら ごめん

北海道 後藤 明美

「あの夏」の場面がよく見える。その時に拾った貝殻を大事にしてきた。しかし、思
い出を捨てるように貝殻とお別れしようと。「さよなら ごめん」が秀逸の表現だ。

【優秀賞】

割らるるを待つ卵殻に包まれて夜の静寂に眠るこの町

山口県 瀬戸内 光

「この町」という言い方をしているが、作者の住んでいる町だろう。わが町の静けさ
を愛しつつ、作者は町も自分も飛躍と発展を願っている。上の句の喩えが見事である。

上陸を果たしたばかりの幼蛙畦草刈れば一斉に跳ぶ

群馬県 桑原 謙一

「上陸」と大きく出た表現がいい。田の手入れをする作者とあたらしい世界を生きはじめた蛙。「一斉に跳ぶ」は両者のダイナミックで鮮やかな出会いの瞬間です。

【特別賞】

◇伊藤一彦 選

わが慕ふキーン氏に続き夫逝きぬ願はくば連れ立ちて黄泉路を

神奈川県 蓮見 孝子

ドナルド・キーン氏は優れた文学研究者だったが、今年二月に亡くなった。作者の夫はキーン氏の人と文学を深く愛していたのだ。下の句の祈りと願いが感動的である。

◇小島なお 選

鋸を挽く巣箱の屋根の勾配の鉛筆の線冬の日の差す

愛知県 清水 良郎

鳥の巣箱を作る途中の場面。木の板にまず鉛筆で下書きをしますのでね。「勾配」の柔らかな曲線に照る冬陽の光には春のいのちの予感が静かに内包されています。

《中学生・高校生の部》

【最優秀賞】

日本一我が県貫く水色の服は大きく袖は多く

群馬県 利根商業高校2年 高橋 陸仁

河川の規模が最大級の利根川を歌った作で、「水色の服」に見立てたのが若々しく素晴らしい。支流を「袖」にたとえたのも巧み。迷わず最優秀賞に推した。

【優秀賞】

夏の日魚を思いいざ行くよ魚と言う名の恋人に

群馬県 利根実業高等学校3年 飯村 剛士

釣りをするのか、泳ぎにいくのか。いずれにしても魚を恋人とする作者の夏はどんなときめきに満ちているのでしょうか。牧水の短歌を思わせる力溢れるリズム。

昔のねあなたはずっとこうだった今言われても知らねえんだわ

群馬県 利根実業高等学校3年 宮城 亜美

作者にむかって「昔のねあなたは」と言ったのは親だろうか、友人だろうか。どちらでも面白いが、作者の返答の言葉が面白い。とぼけた言い方にユーモアが出ている。

【特別賞】

◇伊藤一彦 選

みなかみのバンジージャンプ飛ぶ時に見える景色が大自然

群馬県 新治中学校3年 井浦 信

さすが若い人の歌で、感心した。高い橋の上から命綱一本で飛び降りるとき、身も心も自然に包まれ、抱かれている感じを味わうのだ。リズムも力強く爽やか。

◇小島なお 選

青空に一人で歩く太陽ののろまな帰り僕の休日

群馬県 水上中学校3年 田村 鴻之介

太陽はいつも一人きりでゆっくりと青空を歩いている。そののろまな速度に合わせるように僕の休日の時間も流れてゆくのです。豊かで自在な空の詩。

第三回

若山牧水みなかみ紀行短歌大会

作品集（一般の部）

○一般の部

240人

388首

○中学生・高校生の部

912人

1284首

※中学生・高校生の作品集は別冊

ひとりゆくこころの旅のはたてこそ誰ぞ知らざる山河にてあれ	群馬県	眞庭	義夫
早春に幟はためく農機展武尊おろしに粉雪が舞ふ	群馬県	今井	栄一
孫からの漢字少い励ましの絵手紙壁に透析の朝	北海道	鎌田	誠
「お早う」と「いただきます」と「只今」を聞けなくなりて一人「オヤスミ」	北海道	鎌田	誠
末広に波立て代を搔く農夫散兵率ある騎馬の象す	山口県	藤井	重行
脇に佇つ御地藏様に櫂の木太陽のかけらの木洩れ日を降らす	大分県	佐藤	政俊
ここにいて欲しいと君がせがむ日の散りゆく桜涙のようだ	千葉県	竹谷	華林
絶望が向かいのホーム立っている神様なんてどこにも居ない	千葉県	竹谷	華林
新緑が桜並木となり雪のなお降る北の村へ旅ゆく	秋田県	鈴木	仁
身に染みる酒の味とはこの事か定年退職雪の旅宿	長野県	市川	光男
みちのくのかな訛り漂わせウエイトレスは笑みを絶やさず	東京都	野上	卓
西空を茜に染めて夕暮るる悠久に生く八十五年を	岐阜県	古井	富貴子
ただいまと無人の家に声かけて晩飯つくる今日はオムレツ	静岡県	大庭	拓郎
無い無いと騒いで亡母探し物食べた後でしょ茄子の朝漬け	大阪府	後藤	憲之
物忘れ多くなりたる日々なれど季節を追いて育つ野菜よ	岐阜県	野村	訓啓
孫からの漢字少ない励ましのハガキ壁刺し透析の旅	北海道	鎌田	誠
丸時計風車花無し血が踊る透析室へようこそ旅す	北海道	鎌田	誠
旅慣れて荷物が軽くなっていく人生の旅重い荷のまま	青森県	高橋	圭子

三名湯ひとつも連れて行けぬまま旅の土産を亡父母に買う	青森県	高橋	圭子
望めるは窓よりの空のみにして手術後の日日旅を夢見ぬ	愛知県	星原	風堂
齢かさね旅ゆくことの叶わずにテレビの旅を一人楽しむ	千葉県	高屋	敏子
呑むまではあれこれ躍る胸のうち無味無臭なり胃カメラの味	群馬県	野口	弘
いにしえの自然の姿そのままに不動黒岩凜として立つ	群馬県	大淵	照雄
妹の子犬預かり子育てのやりなおして楽しむ家族	千葉県	うめさわかよこ	
汗かいて歩いて知るや草や木の生きる力と心あるのを	群馬県	大淵	照雄
名胡桃の村主八幡大榎旅の安全祈りいっふく	群馬県	大淵	照雄
墓守りて五年の月日巡り来る孫子連れ立ち田植終たり	群馬県	松井田	久子
秋の野にわたし見詰める独り旅家族のあれど友のあれども	兵庫県	大村	博子
今は無き駅弁売りの声がして中央線の無人駅過ぐ	三重県	岩谷	隆司
産土は赤城南麓あかあかと日の照る丘ぞ日の入る丘ぞ	宮城県	角田	正雄
三芳野の神に祈りし秘むるこひ桜散れども思ひは散らず	群馬県	一色	伯恭
滔滔とダム放流の水嵩が白波たてて兩岸洗ふ	群馬県	深津	一次
朝な朝な谷川岳を仰ぎつつ九十四年奥利根に生く	群馬県	深津	一次
母と僕車椅子積みみなかみへ母の想いはあふれあふれて	群馬県	齋藤	宏子
還暦を迎えこれから旅と酒呪縛よ解けて人生謳歌	群馬県	齋藤	宏子
山法師夕光にふわり浮きたちて夫と眺めた思い出乗せて	群馬県	柴山	利枝

初夏 <small>はつなつ</small> のひかりがまつすぐ届く朝ご飯を風にくるみて食みぬ	静岡県	大庭	拓郎
あの啄木のふるさとの山あの山は何と問われて自慢げに	岩手県	森	義真
「また明日」そろりと部屋に引き込もる見つけて猫は後追ひて鳴く	群馬県	奥村	清美
子雀よ何処まで餌をねだつてるひとりで食べねば生きては行けぬ	群馬県	奥村	清美
君はいまいづこの空をいきゆくやひとり異郷に風聴くらむか	群馬県	眞庭	義夫
脳味噌 <small>から</small> の空の部分に防災の知識満たしていざに備ふる	岐阜県	吉田	順代
一年の世界の旅終え空港にそばを啜りて和らぐ甥の目	千葉県	上田	康彦
柿熟るる大和路を老いの一団寄り道しつつ賑やかに行く	奈良県	堀ノ内	和夫
旅すがら出会いし女 <small>ひと</small> と親しむも話は足りず憂して別れぬ	東京都	華	春
オリーブの花は十字の形して五月の風にゆられていたり	大阪府	名川	由江
藁 <small>わら</small> いずみ泣く子をあやす囲炉裏端 <small>いつきがしうた</small> 五木節詩祖母白を挽く	福井県	高島	栄策
雨を吸う紫陽花のあお かなしみはきつと誰かが掬つてくれる	群馬県	木下	美樹枝
うすれゆく君の心の履歴書に私のページは残っているか	愛媛県	宇和上	正
亡き義兄 <small>あに</small> の旅の宿にて唄いたり「兄弟仁義」夫と肩組み	茨城県	太田	きみ子
汽水湖の水辺に添へる養殖の棚に注げる光遍し	静岡県	杉本	弘子
姑逝きて三十年経つカーネーション <small>くうげ</small> 供花す令和の母の日今日は	島根県	金山	黎子
雨上がりさくさく音立て草刈りし惚 <small>ほお</small> けし父の研ぎたる鎌に	青森県	野崎	和子
わが卒寿祝 <small>ほ</small> ぎくるる席にうたはむと湯船にさらふ「白銀の糸」	大分県	羽田野	とみ

改元で令和となりて新しき事始めにと着付けを習ふ	群馬県	奥村	清美
亡き父の「歯医者に歯など治せぬ」と言ひし日思ふ一周忌の法事	群馬県	奥村	清美
湖の青き面に水動き紙面のごとく我をとらへる	群馬県	持谷	靖子
三国山峠に訪る暮らしあり我の幸せ友に語るや	群馬県	持谷	靖子
わが町を選び訪る旅人をもてなす心秘めし迎えむ	群馬県	阿部	良洋
時折は都会のほひ触れたくて夫婦連れ立ちビルの街行く	群馬県	阿部	良洋
芽吹きたる露の臺摘む妻の笑み今宵は酌まむ春の香で	埼玉県	金澤	隆男
雪消えて日がな一日畑を打つ馬鈴薯植ゑむと黙黙と打つ	埼玉県	金澤	隆男
「二合の二合の酒」とうたいたる牧水ばりに梅雨晴れの宵	群馬県	角田	勝子
病める友安んじ逝きぬ長年の願ひかなひし夫の受洗に	群馬県	白勢	庸夫
平穩に過ぎし昭和と平成と令和己の終末期なり	群馬県	杉木	輝夫
いただきし丹波黒豆とろとろと煮られておりぬ今日は日本酒	兵庫県	野添	一男
縫ひぐるみのアンパンマン・パンダ・ソファーに夜ひる目を開け曾孫来るを待つ	富山県	古澤	澄子
連日の梅もぎ終えてS席のタンゴ楽団疲れをいやす	和歌山県	谷中	明子
ひと昔と言つには早い3・11から想定外は今も新し	東京都	佐藤	春夫
三名城沼田名胡桃小川城址田植の人等眺めつ完歩す	群馬県	堀越	京子
棚田より仰ぐ谷川残雪は代掻馬を今年も描く	群馬県	割田	一
明日からは来た道ならず新たなる残照映へる峠路を行く	群馬県	割田	一

光跡 <small>こうせき</small> を追いつつ習う師の手話を言葉に起こして会話と成す	群馬県	秋山	充利
田植 <small>いなま</small> え唄水面 <small>みなも</small> を走る母の唄植えゆくほどに弾む声聞きにき	群馬県	秋山	充利
花吹雪フロントガラスに舞ひて来る免許返上決めし日の道	群馬県	金井	晶子
まだありき夫の手にせる万年筆残るぬくもり握りしむ夜	群馬県	金井	晶子
なまよみの甲斐に蛇笏を訪ひしとき牧水はたして酒を飲みしや	東京都	庭野	治男
万葉の利根を詠みたるただ一首みなかみに建 <small>た</small> つ徒 <small>た</small> 渉 <small>た</small> の歌碑	群馬県	番場	正夫
のんびりと気が向くまゝに幾山河旅してみたき牧水のごと	群馬県	長浜	利子
猛毒の代名詞のごと鳥兜 <small>きよ</small> 清らに咲ける秋の高原	群馬県	長浜	利子
無いことは有るよりむしろ自由だと気づきて我はまた一歩進む	大阪府	高橋	好恵
黙々と畑の草ひく己がそば寄りつ離れつ飛ぶジョウビタキ	大阪府	高橋	好恵
たとふれば書は目で聴きて音楽は耳で読みたる言の葉なりけり	大阪府	高橋	好恵
紀行文100年経ちて現実へみなかみの地はエコパークとなる	群馬県	番場	正夫
赤谷湖の湖上に並ぶ鯉のぼり緑の風にゆうゆうと尾をふる	群馬県	本多	義二
食事後の入歯をぬいて洗いおえ元にもどせばきびしき父に	群馬県	本多	義二
夕暮れの水張田に凜と立つ絵画のやうな青鷺を見ゆ	群馬県	吉田	まゆみ
虎の尾の白き花房雨に濡れ首を垂れし姿励ます	群馬県	吉田	まゆみ
雪融けの水は滾ちて瀬を早み尾羽根濡らして鳥啼き渡る	埼玉県	前田	明利
やまひ癒え甘露の酒の臍の腑をそろりそろり滲みわたりゆく	埼玉県	前田	明利

海は青燈台白く日は高し乙女椿のうす紅の唇 <small>くち</small>	埼玉県	前田	明利
違和感を少し抱きて座りおり女性の多き敬老席に	群馬県	桑原	謙一
久しぶり従兄弟に会へば「あるある」と介護の話題で話しはつきぬ	群馬県	奥村	清美
タタタタと急ぎ窓辺に走り寄る闇を見つめて動かぬ愛猫	群馬県	奥村	清美
山路へと鶯の声集む風疎き耳にもさやに聞こえむ	群馬県	清水	静子
みなかみの自然を残すエコパーク紀行の中で語られし夢	群馬県	番場	正夫
桑の実の白・赤・黒と輪をつなぎオリンピックの補助食に	群馬県	深代	里子
小雨降る中にレタスを植えゆけば母の遺せし合羽はぬくし	群馬県	高橋	恵
約束は大きな星になつてねと命短き夫に言ふ孫	兵庫県	西塚	洋子
牧水に瓜二つとふ孫の君は甲斐犬ともに師の全碑巡る	茨城県	芳賀	佳壽子
とぼとぼと歩めば夫はじぐざぐに蕎麦の花咲くりハビリの道	群馬県	細川	のぶ子
夕暮れて明日は湖底に沈みゆく校舎跡地に焚火赤あか	群馬県	細川	のぶ子
SLのたくましき音梅雨空を掻き分くるごとみなかみに向く	群馬県	番場	正夫
ツアーバスに妻と並びて二日間久方ぶりの会話 と思ふ	群馬県	熊澤	峻
父母 <small>ちちはは</small> の眠れし丘に夕焼の色濃く染まる野甘草の花	群馬県	湯浅	慧子
金婚を目前にして逝きし夫何処を旅してわを待ちにしか	群馬県	増田	津恵
霧の中木道譲り声交わす水芭蕉尋ぬるあくがれの旅	群馬県	増田	津恵
足先に湯たんぽさぐりて思ひ出づわれのみの知る夫の体温	群馬県	松下	昭代

是か非かと書いては消しゆく推敲はセーターほぐして編み直すごと	群馬県	松下	昭代
朝闇を旅籠の御師の被い受け一歩一歩と富士山登る	大阪府	向井	靖雄
白鳥の色に染まざる哀しみは我にもあらん胸の湖底に	愛知県	中村	佐世子
会話さえ叶わぬ妻に面会の受付欄に氏名書き込む	群馬県	深津	一次
石器かも知らず石もて鍬の土落とせば浮かぶ縄文の人	群馬県	深津	一次
農一筋山坂ありて八十年米寿乗越え益々元気	群馬県	深津	幸子
芸能祭月夜野太鼓杓さばき見事な演技拍手何時まで	群馬県	深津	幸子
寒き日に冬になることと勘違ひ夏の暖房褒めそやしけり	群馬県	持谷	靖子
川遊び民話語りの子供等と手つなぎ歩く親の気持ちなり	群馬県	持谷	靖子
春過ぎて寒さの季節消えて行く夏の風吹き手合せ祈る	群馬県	持谷	靖子
三歳児チン・チン電車の床もぐりはてな はてなの身ぶりで語る	群馬県	岸	和夫
父ははの影を偲びつゆく野ずゑ山の田のあり稲の花咲く	群馬県	眞庭	義夫
曇天にほんのひと隅青い空生きる希望を描くみたひに	群馬県	久保田	桂子
二つ耳を仰ぐ狭間に抱かれし牧水歌碑を偲ぶ旅行き	群馬県	光山	半彌
秋冷の茶店に憩ふ独り旅威風へうへう牧水の像	群馬県	光山	半彌
「出しました。届いたはず」のラブレター母は知らぬと頑張り通して	山口県	山縣	満里子
塩浜に三つ四つ小さき虹の立つ海水を撒く海水を撒く	山口県	山縣	満里子
客が言う「腹の底から声を出せ」声より先に手が出そうだよ	岡山県	小橋	辰矢

暮坂の峠を越えし乙女らの声高らかに昼餼に向かう	群馬県	中澤	一貴
六合 ^{くく} 発ちて沢田を過ぎて新治 ^{にい} へ村名は消え牧水は在り	群馬県	中澤	一貴
嬰兒 ^{みどりご} を背負ひ手を引き引揚げし気丈な妣 ^{はは} の今日は命日	群馬県	志田	貴志生
君一人途中下車して四十二年 ^{よんじゅうにねん} の旅は終りぬ古稀すぎし秋	大阪府	松田	美智子
言の葉の本音を探り横顔と指先を見て聞き返す夜	岐阜県	江尻	恵子
村境魔除けの草履風にゆれ古きしきたり和みゆく里	群馬県	木村	初枝
窓開けて山並見れば若葉風読みかけの本めぐり過ぎゆく	群馬県	木村	初枝
わびしさに堪えて旅するあくがれの利根の山川ただに青やか	群馬県	生方	辺秋
越し方を盃に浮かべて彷徨のひとり静かに三国路をのむ	群馬県	生方	辺秋
けふはここ明日 ^{あす} はあそこと出掛けたし足の向くまま気の向くままに	兵庫県	金田	美恵子
大方の父の役目を終りけり父の日ひとり冷酒酌むなり	群馬県	杉木	輝夫
あばら屋を見おろしている子持山仰ぎ見ているあなたは少女	群馬県	本多	あきお
赤城原 ^{あかぎ} は暮れてあばら屋はいまもそこに立つ北風に出て星を見ようよ	群馬県	本多	あきお
夕映えに染まることなくひまわりは金環蝕のごとかがやきぬ	群馬県	久野	公市郎
検診の結果悪しきを知りたる夜解毒のごとく酒をあほりぬ	群馬県	久野	公市郎
御巢鷹 ^{おすたか} の峰に黙する千葉鶴祈り重ねし人も老いたり	群馬県	久野	とし子
登り来し齡 ^{よわい} の坂にいささかの憩ふ場のあり秋の七草	群馬県	久野	とし子
かくとだに老いて蛩をなほ愛す熱き心のありてむなしき	群馬県	久野	とし子

トンネルを越え来し聖火吾子が継ぎ三 <small>みくに</small> 国路走しる遠き日のこと	群馬県	品田	幸子
みなかみの峡路をたどりし牧水の雲ながれ逝きまぼろしの影	群馬県	手塚	光子
野や山へ誘ひくるるや木の枝ゆれ工事信号待つ時の間を	群馬県	眞庭	ヨシ子
新緑の榛名山にのぼれば傍らに亡夫のゐるやう榛名湖ひろく	大阪府	熊ノ郷	紀子
「九州の人は」と言はれるそのたびに「本州の人は」と返したかつた	愛媛県	大賀	康男
明日の予定を友に聞かれて恃みなる手帳が頼りの応えとなりぬ	岐阜県	大栗	紀美子
訪ふことの再びなきとアルバムの蔵王の御釜のみどりに見入る	福井県	玉井	令子
庭隅の柚子の白花咲きみちてわずかに匂う朝風の中	群馬県	高橋	吟子
水無月や利根の山脈 <small>やまなみ</small> 濃く雪解水は田畑潤す	群馬県	高橋	吟子
万緑の利根の山脈北の涯 <small>はて</small> 睥睨するかに谷川岳立つ	群馬県	高橋	吟子
みなかみの美 <small>は</small> しき自然に惹かれ来てこころ癒しつ思い出刻む	群馬県	今成	美泉
苦も楽も夫婦となりて半世紀光陰を経て令和の御代に	群馬県	今成	美泉
岩肌 <small>いわたま</small> に小さく生き付く雪の下白き花花雨に濡れつつ	群馬県	吉田	まゆみ
沢下りて一休みする吾の側駒鳥鳴きて岩に止まれり	群馬県	吉田	まゆみ
あさつゆのピイチクないてみつ桜初めて知った天然の味	群馬県	深代	里子
下手くそな短歌も唱歌のあやふやももらった声で臥す老母 <small>はは</small> のそば	群馬県	忽滑谷	三枝子
杜深く喜志子の歌碑は一条の光となりてわれを導く	神奈川県	富田	茂子
八管山 <small>はすげさん</small> さねさし相模の杜深く喜志子の歌碑の息づく如し	神奈川県	富田	茂子

輪郭の歪んで見える夕暮を物の真中に瞳をこらす

群馬県 佐藤 真理子

梅雨晴の空の果てには爽やかに至^{しづつ}仏の山は聳え立ちをり

群馬県 白石 政江

原爆に焼かれし身なれど吾子のため必死に乳を飲ませし母よ

群馬県 白石 政江

雪溶けのひと雫の水集まりて小滝となりつつ尾根流れゆく

群馬県 白石 政江

若き日に彼と呑んではよく聴いた歌が聴きたい「花街の母」

香川県 森本 義臣

泥の付く皮より出でし筍の真^{まかな}愛しきまで肌^{はだへ}膚きよけし

神奈川県 藤原 礼子

旅先で撮った写真のいきいきとまだ歩けた頃の母に笑顔見ゆ

大阪府 小野 まなび

託したる稲田見に行く夫の背に九十四年の歲月刻まれてをり

群馬県 高橋 やま

みなかみの川辺にふわり初ホタル灯りては消ゆる暗号のごと

宮崎県 熱田 民恵

いつまでも水上町綺麗なり奥利根湖と利根川澄んでいる

大阪府 群馬 之川

端正な白を抱えて向いゆく玉川上水はつ夏の午後

群馬県 桑原 環世

銀河まで歩き続けてみたい夜三万光年星が棲む場所

群馬県 桑原 環世

森暗く数百年の幹太し人は息荒く樹々の間走る

群馬県 橘 祥之

咲き初めしたいさん木の花いとし花より脆き人のこころは

群馬県 橘 祥之

ふつくらと縮れる大葉の香りたちUターン暮らし正解とする

群馬県 川本 福江

庭を掃く夫に寄り添ひ草を引く二人のびのび老いてゆきたし

群馬県 木村 あい子

田植機の赤きが早苗植えて行く水に映りし雲を掻き分け

大分県 原 ひろし

合^{ねむ}歡の花見上ぐる空を浮き沈む風の自在に逆らいもせで

大分県 木村 弘治

道端に咲きたる花の峠越し今にも飛び立つ様に見えたり	秋田県	二牟礼	勉
特攻は十死一生この不条理な死にあらがふごと蛸とびかふ	東京都	谷川	治
梅雨ふかき峡の八戸に七灯し限界集落に歯止めかからず	東京都	谷川	治
橋の名によすがを偲ぶのみとなる合併に消えし吾が村の名は	東京都	谷川	治
子を育て義父母につかへ生涯を蚕飼ひにつくし母は逝きたり	東京都	谷川	治
「ねえちゃん」とまとはりつきし妹よ継母と去りてその後を知らず	群馬県	高橋	操
明日から俺は卒寿だ心せよステッキ振りふり行く夫を追ふ	群馬県	高橋	操
夕暮れの里道は父母のふところ慕情深むる月美草咲く	群馬県	中島	早苗
さりげなく桜月夜に万葉のわれをさそいて何言わんとす	群馬県	深代	里子
水無月の悠久の雨身に受けて牧の水はむ乳牛をみる	群馬県	小野	俊郎
初越の小道で吹いたオカリナに合わせてひびくどりのさえざり	群馬県	倉田	富夫
旅人のふれあう様にさそわれて画面の中にわれ入り込み	群馬県	倉田	富夫
秋雨のバケツの底に打ちつける過ぎし祭りのお囃子太鼓	群馬県	田中	春枝
ねぎ畑一人草とり帰宅して大きくなったかと父の笑顔	群馬県	小林	はつ江
人生をかけてみたんだ紙芝居みんなの心明るくなあれ	群馬県	宮崎	りえ子
天空をあおぎて見えず星達をおしむ人らに吹くオカリナ	群馬県	倉田	富夫
昼の月存る広場にて葉桜かげ乙女のころの歌ハモル友と	群馬県	星野	芳子
群大理工大学院修士宇宙のブルー胸に初入社万物に感謝	群馬県	星野	晋一郎

認知症の友と会話し歌樂し返りの山道鴉の羽拾ふ	群馬県	星野	波奈子
丸太輪切り庭椅子となし虹見をり牧水の歌口ずさみつつ	群馬県	星野	波奈子
我が孫の我が子に似て来なにごとのふしぎなけれど花一もんめ	群馬県	星野	波奈子
果てしなき無限大の宇宙に想ひよせ我が人生の楽しからずや	群馬県	星野	真輝
イヌワシの気流に乗りし勇壮が利根の自然と残る幸せ	群馬県	番場	正夫
老いたれば業師 <small>わざし</small> の名おも儘ならずファンに惜しまれ土俵去りゆく	群馬県	番場	正夫
退職し戻りて郷に観るものは岳の自然と利根の流れぞ	群馬県	番場	正夫
降りて止みそしてまた降る長梅雨に濁り増し行く利根の水嵩 <small>みづかさ</small>	群馬県	番場	正夫
勝ち越して白星に泣く童顔の肩に膏貼る小兵輝く	群馬県	番場	正夫
混沌の中に眠れる悲しみはいつしか私の象となりて	三重県	樋田	由美
木鋏の鈍き音して枇杷の実は葉ごとくるつと青空に舞ふ	群馬県	木暮	由利子
我が父は境音頭制作に奔走し温泉愛した熱血漢	群馬県	新井	恵美子
医療人責任感の母の背に習いて我も薬剤師の道	群馬県	新井	恵美子
揺れ動く思ひを断たむと花咲かぬ庭の桃の木ばさりと伐りぬ	群馬県	石井	省三
子らの歌ふ「ほー蛭こい」と川内川無数飛び交ひ過疎よみがへる	神奈川県	高山	克子
香を彩 <small>いろ</small> に声を形に出来たならあの日の想ひ伝はつたらう	岡山県	山崎	佳奈子
旅人も咽を潤す湧き水の今も残れり丸太椅子あり	長野県	井澤	栄一
まほろばにドロン、ミサイル飛ぶ令和日傘さし行く企業紳士等	岐阜県	加藤	シズカ

詩集入れ辞書を収めて旅に出る重くふくらむショルダーバッグは 間違ひは五つとあるやに見つからぬあと一つはと脳トレ励む	香川県	寒川	靖子
長かりし梅雨も明けよの激しさで雷雨過ぎ行き茜色の町	群馬県	奥村	清美
香流 ^{かな} れゆく水面の花も移ろいて令和なりしも逢はむと思ふ	群馬県	奥村	清美
さくらんぼ最盛期なり注文にうからら集ひ多忙極める	愛知県	伊藤	輝和
同窓と六十年ぶりの江の島鎌倉これぞ修学旅行気分よ	群馬県	小林	博子
長雨に野菜高値となりをれどたつぷり味はふ自給自足は	群馬県	小林	博子
稲作の生育遅るるこの夏の異常低温と長雨憂ふ	群馬県	小林	博子
峠越 ^{いじょう} ゆ一郷の灯のまたたきて一ドルの夜景つつましくあり	群馬県	前原	杏
夏つばき夫が植ゑたる庭のすみ月命日に白き花の落つ	群馬県	岡田	敦子
二人して四季の里山歩きたり今年はひとり紫陽花の中	群馬県	岡田	敦子
朝霧の薄るる中に行き合ふや芒ヶ原の其処此処にこゑ	東京都	堀井	邦子
太宰の碑を下り来たれば映ゆる富士湖 ^{うみ} 抱きつつ夕つ陽に照る	東京都	堀井	邦子
年老いて汗水たらし山仕事喉の渴きに一杯の水	群馬県	岡山	光夫
谷川の分峰駆け降り一滴が大河となりし生命育む	群馬県	岡山	光夫
煎餅をキャッチす鷗いつしかに船を離れて粟島見え来	群馬県	田村	鶴江
花の原跳びだす縞リス吾を見て口に手を当つ大雪 ^{だいせつ} 山背 ^{つせな} に	群馬県	田村	鶴江
幼児の驚く声たつ「青池」の水の青さに暫し息呑む	群馬県	田村	鶴江

大雪山の山道ゆけば又も会ふきつね寂しや吾をおそれず	群馬県	田村	鶴江
手を振れる児へ応へむと小海線窓開け振るや飛び跳ねる児よ	茨城県	飯田	初江
農継ぐ子無くて現役草刈れば絶えしと思ふねじ花咲けり	群馬県	阿部	伊亨
長梅雨に乾かぬ畑の草を引く老鶯鳴きて心慰さむ	群馬県	阿部	伊亨
安美錦けがに耐へたる二十余年土俵をわかせ燃え尽きて去る	福井県	大江	青流
ひと振りにはサヨナラを成し監督のミスを帳消し孝行代打	東京都	遠藤	玲奈
木枯に散りくる落葉「藤原」の風鳴る音も淋しささそふ	群馬県	佐藤	瑞恵
供へおく十三蜷汁湯気ほのか夫のお下がり心温もる	群馬県	神澤	静枝
六月の明けゆく庭に気配する鳥にわたしに今日がはじまる	東京都	高橋	登喜
寂しさを消す薬売り見つけたと告げてあなたが消えた三日月	三重県	田中	亜紀子
朝露に光る胡瓜を挽ぎ終へて六時を知らすチャイムを聴きぬ	群馬県	林	郁男
億光年の青の底からやってきた孤独を見てる無音の夜は	群馬県	大澤	澄代
「今日はちよつと泣くかも知れん」四歳は保育園の前しばし立ちいる	岐阜県	横山	美保子
山深くうす紅色群れ咲ける姫小百合の中少女となりつ	群馬県	石田	恵美子
中央の分水嶺と記のありてこの山の花に未だ魅せらる	群馬県	石田	恵美子
小雨降る産土神の古木よりうぐいす画眉鳥のデュエット聞こゆ	群馬県	石田	恵美子
梅雨さなか旅にて転び顔打ちて五衰身に沁む老いのすべなさ	東京都	竹野	紀子
囲炉裏火の煙の向かうにひよつこりと腰まげて立つ母のまぼろし	東京都	荒井	千枝

麦を干す時季かと思ふ長梅雨に父母の嘆きを聞くごとき雨	東京都	荒井	千枝
あの世では勇と牧水コップ酒北斗の柄杓に閻魔も来たり	高知県	土居	健一
柘榴らの蕾のやうな頑固者老ひて益ます片意地を張る	高知県	土居	健一
息子のメール待てど既読にならぬままようやく一言「大丈夫です」	群馬県	佐藤	静舟
桑畑ひびかせ鳴きぬしにいい蝉いまその声は耳鳴りのなか	群馬県	林	恵美子
あぢさゐの一株百個みづみづと花咲きつづく長雨の中	群馬県	林	恵美子
老いの世や月に一度の短歌会生きぬる実感ありて楽しき	群馬県	林	恵美子
長雨に陽差し少なき日々なれど山あをあとと蝸鳴けり	群馬県	林	恵美子
前垂れを八十路の叔父はきりり締め蕎麦打ちし昔暮坂峠に	群馬県	中島	早苗
万葉の宴の心梅の花令和へ届く千年の旅	群馬県	林	明男
駅への帰路たどりつつ思ふ牧水の学習会に遭ひし彼の人	広島県	小野	系子
初夏告げる天神峠の谷空木微笑みかけるリフトの客に	東京都	長島	勝廣
蛩舞う武蔵の国の国分寺天平の代もかく舞いたるか	東京都	長島	勝廣
紫陽花の花の盛りと梅雨の時期年々広がるミスマッチの怪	東京都	長島	勝廣
空梅雨の紫陽花の葉に隠れたるでんでん虫の角の短かさ	東京都	長島	勝廣
淫雨へと長引く雨が疎ましく泣いてくれるなあ「虎御前」	東京都	長島	勝廣
穴子漁十三ミリの筒の穴稚魚を逃して資源を守る	東京都	長島	勝廣
三男坊新妻連れて里帰り祇園祭りの宵に合せて	東京都	長島	勝廣

喜寿過ぎて生まれし初孫抱くたびに嬉しさ削る腰の痛みに	東京都	長島	勝廣
あの雲の向こうに君は逝けにけり一般山行のプラン残して	東京都	長島	勝廣
ホーホケキヨ庭に飛来し鶯は盛夏の朝に季のずれを鳴く	東京都	長島	勝廣
書を読めば数々の未知解けゆけどこの世が見えぬ若かりし日々	佐賀県	浦田	穂積
途中下車の旅したるやに矢車草枕木の間到低きが咲きぬ	福井県	杉崎	康代
引き出しに見つけし父の肥後の守わが少年期の宝鏝びたり	石川県	前川	久宜
燦めいて春の光に坂東太郎命を育む百代の流れに	群馬県	小畑	吉克
丈低き草木まばらな溶岩台地に野豚黒山羊朝の日を浴む	広島県	杉之原壽美子	
鶯の声美しく流れ来る緑染めなす峰々の奥	群馬県	高倉	榮
若葉風受けて燕が宙返り谷川岳は沢雪の鬩	群馬県	高倉	榮
うすれゆく視力頼みて一步二歩下りてゆくも米寿の坂を	群馬県	青木	ソメ
谷川の瀬音に目覚む山湯宿木々の緑と郭公の声	群馬県	原澤	芳雄
可愛くて触れてみたくて君達に岩合さんの「世界ネコ歩き」観る	群馬県	佐藤	美知子
巡り来る季節を一年待ちわびて春の流れに花筏最る	群馬県	佐藤	美知子
富岡の座繰り体験孫と行く土間で糸繰る妣の浮きくる	群馬県	澁谷	典子
茄子・胡瓜今朝は茗荷も香を放ち夫の菜園家族和ます	群馬県	澁谷	典子
孫と行くラジオ体操小走りに朝のみなかみ空気の旨し	群馬県	澁谷	典子
ご先祖の守り伝えしみなかみの景観・情確と次代へ	群馬県	澁谷	典子

辛きこと乗り込める毎太くなる家族を結ぶ目に見えぬ糸	群馬県	澁谷	典子
外つ国の君と開いたカフェ閉じる最後に君はピザを振舞う	群馬県	ベネット昭子	
君たちは何と言うトンボ？ 楽しげに青田の上をくるくる回る	徳島県	坂東	典子
母見舞ふ岸に群れ咲く野萱草花揺らし吹く風を涼しむ	千葉県	松田	恵子
山吹の手を振るように踊る朝風の楽章あたらしさ呼ぶ	静岡県	井上	充
夏椿の花に飛ぶ蝶窓に見てとぎれし会話の接ぎ穂としおり	福島県	鈴木	桂子
紅葉を水面は映す藤原ダム産土の村湖底にねむる	群馬県	山口	タツ子
杜の前田んぼの後ろ自転車走る少女はさみどりの風	東京都	古賀	のり子
花びらのふちの形の違ひ言ふ母のこだわり故郷の仙翁	東京都	古賀	のり子
『どうしてるの』何時もは忘れてるけれどふと会ひたいと思ふ雨の夜	群馬県	奥村	清美
水と油交はる事なき母娘なり他人であれば会わづに済むに	群馬県	奥村	清美
長梅雨にダム放流の故郷は濁流となり利根の瀬荒す	群馬県	諸田	弘
エコパーク自然動物奥利根を未来へ繋ぐ課題満載	群馬県	諸田	弘
奥利根の水源の町みなかみは源流まつり賑うダム湖	群馬県	大森	和子
牧水の去り行く姿思ひては「いい日旅立ち」ふと口ずさむ	群馬県	天田	勝元
冬ざれの野に振り向けば夫が居た風にあらがひ夕日背負ひて	群馬県	岡田	正子
町内をペダル踏みゆく小さき旅風花たんぽぽ蝉彼岸花	香川県	上久保	忠彦
かさこそと晩秋の風に鳴る落葉地面に踊り天空に舞ふ	群馬県	保坂	スミ

満月のスポットライト浴びながら今宵私はプリマドンナよ	大阪府	田倉	あけみ
わが植ゑし庭のトマトの熟れ初めて挽きたる孫と会話の弾む	群馬県	湯浅	茂子
田植ゑの泥爪に残して初歌会蠟燭灯る卓袱台丸き	群馬県	湯浅	茂子
戦国の世にも劣らぬ鬨の声パドルをかかげ向かう利根川	東京都	平山	暁生
梅雨冷えの毎日気になる子供達元気だよと返信届く	群馬県	小林	はつ江
終の地と決めし桃源みなかみは自然の恵みと人の情よ	群馬県	遠藤	長代
投票日心に決めた人の名を姑は書くため車椅子乗る	群馬県	本多	美恵子
夏の海ドライブ中に舌鼓高きひかりがたわむれどき	群馬県	篠原	忠
何処いくか？電車の中で夕陽見て長い光が旅の行き先き	群馬県	篠原	忠
会えた日に交わす笑顔と母の背に「長生きしてね」言葉に出せず	群馬県	小林	和子
末摘花 黄花と寄り添うあの人の紅うつろうをただ待ちわびる	群馬県	山崎	杜人
七夕の夜にいつもの喫茶店君は決まってクリームソーダ	群馬県	吉田	まゆみ
親友の重き病の知らせ来る盆の飲み会逢へぬ切なさ	群馬県	吉田	まゆみ
おぼろげな記憶探して目を閉じる君と遊んだ夏会いたくて	群馬県	大山	智也
そっくりと言われる度に照れ笑い我の分身今日も園行く	群馬県	大山	智也
梅雨の夜に遠く聞こえるたいこの音そろそろ頃には夏が本番！	群馬県	大山	真紀枝
はいらないあたまあらわないうあがるビールのんじゃダメアイスはたべる	群馬県	おおよま	はるき
紫陽花の雨に彩るキラキラと雫に浮かぶ父母の顔	群馬県	齊藤	淳子

雨香る紫陽花の花揚々と花好きな母にそつと供える	群馬県	齊藤	淳子
ストローで氷つついてからりと音たてグラス向こうには君	群馬県	篠原	香代
ぽっかりと空いた右側 君の中不可侵地帯地雷が見える	群馬県	塚川	紗妃
心地よい指と指に圧受ける本当に君をスキでもいいの？	群馬県	塚川	紗妃
とりどりに光る電飾にじみだし雪は伝える君は来ないと	群馬県	塚川	紗妃
ちいさくてチョンチョンとエサさがし涙なみだのわが身と同じ	群馬県	深代	里子
碁敵と独居気楽と酌みし日は木の実落つ夜半寝返りを打つ	群馬県	原沢	竹路
驟雨去り雫に光る雨蛙しやがみこむ児の瞳輝く	群馬県	原沢	竹路
月ひとつ胸刺し通す心地して目を伏せ辿る夜明けの道を	秋田県	蓬田	真弓
あなたから失望されていたことに気づけなかった春が遅くて	秋田県	蓬田	真弓
わがままを言いし子供のような夫思ひ出すのが今はうれしい	京都府	鱒本	ミツ子
途絶えたる友の行方を聞く人もなく対岸の貨車を目に追う	群馬県	深澤	みどり
立ち遅れ生きてゆくなり令和をも昔日のままに雲は流れる	群馬県	菊池	悦子
くろぐろと暗渠の底にひろがりし川面は今も光満ちけり	神奈川県	近藤	千壽
かなぶんの亡骸つつむ手のひらはあんずの種ほど柔きふくらみ	神奈川県	近藤	千壽
歌人を追ふがに夫は転勤す六合村・孀恋村・草津・水上	群馬県	白井	清子
ソーダ水ピチピチパチとおしやべりで夏のひと日は早薄れゆく	群馬県	久野	とし華
あじさいの小部屋に満ちし水の玉さもなき風にこぼれ落ちたり	群馬県	久野	とし華

水上の妻をとられし老人 <small>おにいびと</small> よ間もなく注 <small>つ</small> がん酒と涙を	群馬県	岡元	生泉
梅雨曇りにハイビスカスの描かれし湯のみ二つに新茶を注ぐ	群馬県	大竹	春江
六歳には六歳なりの悩みあり登園拒むその目のうつろ	石川県	橋本	美津子
慰問せし介護施設の百歳の男はじいつと、舞台を見つむ	岡山県	三宅	照司
品定め手間と思ひし時あれど幸とて気づく義母亡き母の日	鳥取県	生田	麻也子
ブランコの上にちよこんと雪うさぎ南天の目とユズリハの耳	鳥取県	中本	久美子
牧水を待ちし喜志子と夫を待つわれとは違ふと谷川の冬	秋田県	村田	磨理子
蘇 <small>みとせ</small> る三年の春よクラスの子は担任かこみ輪を解かずぬる	長野県	穂苺	真泉
初夏の樹々の梢の囁きに耳を澄ませば微風 <small>そよかぜ</small> になる	群馬県	山北	信広
利根川に筏を浮かべまどろめばかりの彩 <small>あや</small> にたまゆら落つる	群馬県	山北	信広
たんぽぽの綿毛は言へり「此処いらで球形くずし消えても良いか」	福岡県	西山	博幸
パンドラの青色蓋を開ける時心臓の爆音宇宙と交信す	宮崎県	青山	昌子
石段を一段一段下りゆけばたどりつけそうな夕焼けの空	京都府	福西	直美
この町からふつと消えたき雨上がり明るむ道をネコ過ぎりたり	京都府	福西	直美
休校でなくて廃校満開の桜は子らを迎へ続ける	大分県	金澤	諒和
小紫のこまかき花をもめぐり飛ぶ働き蜂はすべて雌とふ	滋賀県	俵山	友里
お日さまとお米の味が和合して六腑に沁みる今宵は差しで	兵庫県	柳澤	賢一
「ミッズオクレエ」夏の下校路紺屋にて日びに貫ひし掛け流し水	群馬県	新井	八重子

つつがなき暮らしの朝よ秋風は豆御飯冷ましゆくなり

牧水の未発表の歌寄贈さる図書館で観し太陽の歌

白^{しろがすり}絢の君と歩ゆみし畑^{はた}の道甲斐の山並み遠く仰ぎて

群馬県

宮崎県

奈良県

塚越

中村

大森

小枝

葉月

富士子

第三回若山牧水みなかみ紀行短歌大会作品集

令和元年十一月十七日発行

編集／発行 若山牧水みなかみ紀行短歌大会実行委員会

〒379-1305

群馬県利根郡みなかみ町後閑321-1

みなかみ町教育委員会内

電話 0278(25)5025



第3回若山牧水みなかみ紀行短歌大会作品集

- 開催日 令和元年（2019）11月17日（日） 午後1時開会
会場 みなかみ町カルチャーセンター 群馬県利根郡みなかみ町上牧 1735
主催 若山牧水みなかみ紀行短歌大会実行委員会
共催 みなかみ町牧水会
後援 みなかみ町・みなかみ町教育委員会・群馬県・上毛新聞社・三成社株式会社
おちあいしんぶんマイタウンたにがわ・沼田エフエム放送株式会社
（一財）三国路与謝野晶子紀行文学館